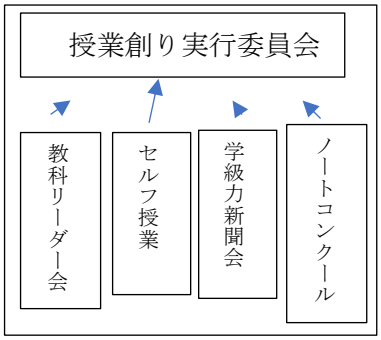
７章　子ども研究会・教師の校内研修会

「主体的」・「個別・最適」をキーワードにすると、子どもと教師の合同校内研修組織がなかったことを不思議に思う。全国各地で多くの方に出会い、校内研修のことを聞いた。やはり、「校内研修の改善の必要性」は分かっているが、「教師や学校外の組織の変わらない」ことがあることを憂いていた。次期学習指導要領や学習の IT 化に期待をするが授業や校内研修は変わらないと思う。

そこで、全国で取り組んでいる授業改善が参考になる。それらの学校では、子どもたち、特に子ども（生徒）自身が「校内研修の組織」をつくり、授業改善や学力向上に取り組んでいる。飛躍はするが、ゆくゆくは教師の校内研修が少なくなり、子ども自身が主体的に進める組織が主となることが望ましいと考えている。それは、子どもの学習リーダーを中心に仲間で学ぶ環境（ラーニング）が整ってきたからだ。

ある中学校の授業前の生徒の説明。

１　児童が創る授業改革システム（備品 249）



(1)　授業創り実行委員会（3 年生以上）

３年生以上の授業改革の実行委員会である。ここが中心となり授業で取り組む理論等をまとめる。また、授業評価の方法や、研究発表会での仕方をまとめる中央委員会だ。

(2)　教科リーダー委員会（3 年生以上）

各学級で教科毎の教科リーダーを選出し授業の司会進行、リーダー授業台本作成、板書、教科用語（キーワード）の事前選出、教科内容の事前学習等を行う。

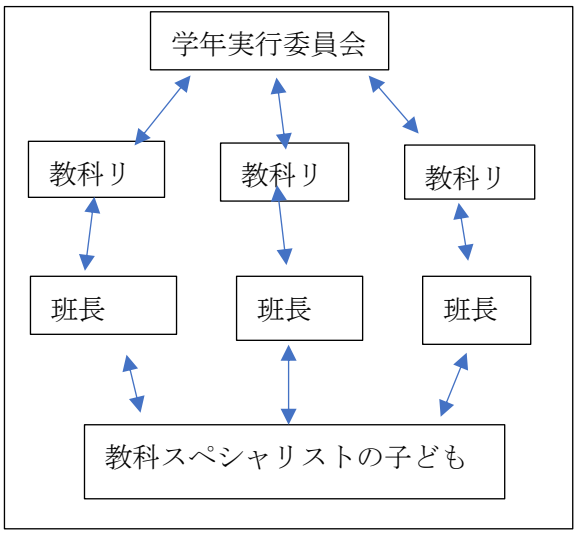
(3)　セルフ授業集会

全学級でセルフ授業を行い、全児童が集合し、各学級の振り返りを行う。年度初めは、転任してきた教師や 1 年生に「授業の進め方」を授業公開する。

２　生徒が創る授業改善実行委員会（備品 248）

「いつも実行委員が中心になり動いていますが、今回は班長、道徳係もファシリテーターの役割をします。これまで班長やリーダーと、動き方の打ち合わせをしてきました。通常は実行委員が中心となりやっていることを班長や道徳係も行うように計画しました。実行委員が見本を示し、班長が実際授業の中でも動ける練習をしました。だから班長も自分毎のように伝えられるようになっています。道徳委員だけでなく実行委員も班長も動く力をつけています。」、これは生徒の言葉だ。ここに生徒が授業を創る意義を見出すことが出来る。

生徒が創る授業は、問題解決的な学習（授業スタンダード）が出来ていることが必須の条件である。生徒が授業を創るためには、課題設定から班学習やまとめ、振り返り等の学習方法をマスターしておかなければならない。



各学級から選出された、授業づくり実行委員が学年にいる。学年実行委員の中から選出された実行委員長。さらに学年を超え、校内全体実行委員会がある。

学年実行員会は、研究授業の開催の時は、学級を超えた会合を数回もち学年全体の公開授業に備える。学校全体会では、授業改善の進み具合等を確認する。

これらは、これまでの教師の校内研究組織と似ている。特徴は生徒の中に授業改善組織があることは画期的なことだ。特別活動の委員会活動と似ている。また、部活動と同様、各教科が部活動のような組織ともいえる。

３　７リーダー（備品 249）

４年生が発案した。7 教科の教科リーダーが集合し、授業の組み立てを行っていた。教師が代休で休めるように教科リーダーが中心となり動いていた。話を聞くと、「①クラゲチャート」を使って仲間に授業内容を伝えました。その内容は②資料をまず自分が勉強し、仲間に配布する資料を作りました。③資料から分かったことをみんなに短冊に書いてもらいました。④みんなで発表をし合いました。⑤いろいろな意見が出ました。⑥考察の時の中心の課題は、「伝統を守りながら新たな器づくり」です。⑦みんな発表をしてくれたので嬉しいです。⑧進行表を作りました（台本）。青色はみんながノートに書くこと。赤色は課題やリーダーが疑問に思いみんなに伝えること。緑はタイムスケジュール。茶色はみんなが発表しやすいようにペアで組むことです。」

担任は、学習リーダーに「アドバイス」をして「後は頼むね」と言って翌日に代休をとった。学習リーダーは、家に帰って予習や資料の作成、授業台本を作成してきた。学習リーダーとして徹底的に勉強をした。みんなの鏡になるようにした。自分のやることを分かりやすくするために、「クラゲチャートや」表を作りみんなに分かりやすいようにした。」と説明した。7 教科のリーダーの一人「7 リーダー」の活躍はすごい。！

４　子どもが校内研究（授業）を担う（備品 249）

私たち教師の校内研究は、教師だけで行うものではなく、子どもたちが予習をして教科リーダーの基に学習を進めることに「舵を切る」時だと思う。教師の授業の腕前を見せるのではなく、子どもたちの主体的な進行を支援することに変える時期だと思う。個別最適や協働的な学びの研究の前に、改めて「子供どもが進める主体的な授業」とは何かを考えて欲しい。このことが今後の教育課題になることは間違いない。

５　子ども校内研修委員会（備品 290）

(1)　学習リーダーが授業の進行を担う
(2)　セルラーニング用の「授業の打ち合わせシート」や「授業台本」（子供版学習指導案）を書く
(3)　「授業評価」「授業評価会」を行う。
(4)　学力向上会を開催する。
(5)　研究会の冊子を作成する。

「小学生の頃は、先生たちが授業を進めてくれたので考えようとしませんでした。今は、授業を進めることは、とても大変なことだと実感をしましたが満足感もあります。」中１の生徒談

６　教師の校内研修会

(1)　「セルフラーニング」の常識を自覚
(2)　子どもとの授業の打ち合わせを行う
(3)　学習指導案を作成
(4)　子ども授業評価会に一緒に参加する
(5)　教員間の事後研究会（短時間）
(6)　学力の平均点を上げる
(7)　子ども校内研修実行員会に全教員の参加

◎Ⅶ　セルフラーニング型子ども授業評価会（備品 281）

セルフラーニングと一体になっているのは、授業後の子ども協議会だ。その協議会の２例を示す。

「私の考えと授業研究の仕方が違う」かつてある教師から聞いた言葉だ。授業は教師が進め、説明調が当たり前。腕に自信のある教師主体の授業論等からきているのだろう。また、見方・考え方に傾注しすぎる授業となるため昔の授業と何ら変わらない。評価基準も設定されるが、教師からみた評価となり次の授業へいかしにくい。本来の授業評価基準は、子どもが設定するではないか。校内研究も教師だけの内輪の会で終わる。当たり障りのない意見が出て終了。WS も行うが、教師間のやった感だけで終える。では、どうすれば授業や校内研修が変わるだろうか。

その**キーワードは、子どもたちの存在**だと思う。子どもが主体的な授業が私たちの目指す授業だからだ。校内研究も子どもと教師が一緒になりを進める。この当たり前を大事にしよう。

１　授業打ち合わせシートと子供全員協議会

御津中学校は、子どもたちが一緒に創る授業・校内研究に動いている。子どもと教師が一緒に創る授業や授業研究こそ、子どもが主体的な授業に近づく。「校内研究も子ども主体」の取り組みをご紹介

(1)　授業力カード（振り返りカード）

①授業後、その場で「授業カード」を配布し、記入する。　３分
②グループで話し合い、グループの結論まで出しておく。　５分

(2)　学級毎「授業シート」

授業の学び方チェックポイント(御津中)

＊授業の相互評価のカードである。自己評価から班評価、学級評価への相互評価

記入者　　年　　組　　番　（　　）

	「授業力」のチェックポイント	今日の授業で達成できたか。〇を付けよう
1	「まとめ」を自分の言葉で説明できたか	できた　　できなかった
2	キーワードを使って学ぶことができたか	できた　　できなかった
3	話し合い中に２回以上自分から意見が言えたか	できた　　できなかった
4	わからないところがわかったか	できた　　できなかった
5	「キーワード」を２回以上使って話し合うことができたか	できた　　できなかった
6	自分たちで授業を進めることができたか	できた　　できなかった

達成できた理由を書こう
たが考えたことを書いてください。

(3)　生徒授業全体協議会の流れ

テーマ：5 時間目の授業の「授業力」は☆いくつだったか

①４つのグループをつくり、グループ内で意見を伝え合う→教室で行う
②各グループの代表者が「達成できた☆」についてクラス全体に発表する
③発表をもとに、クラスの授業力を確定する

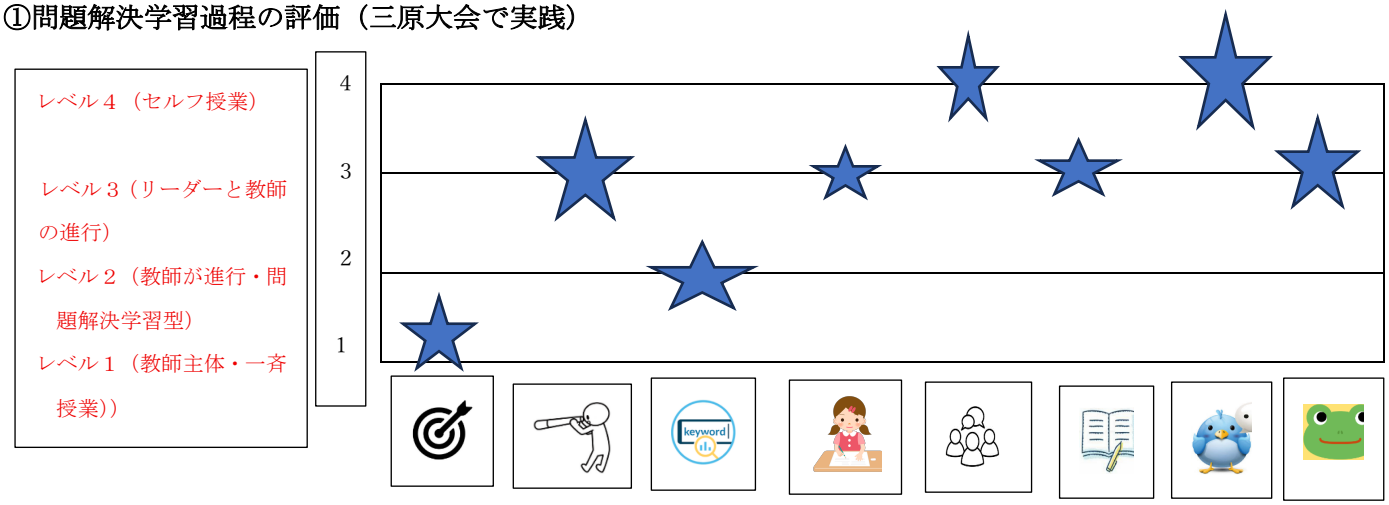
④授業力をあげるために、これからどう取り組んでいけばよいかをグループで話し合う。先生も話し合う。
①～④終了まで 10 分　ここまで学級毎

⑤グループの代表者が意見を発表した後、先生にも意見を聞き、もう一度話し合う
⑥「授業力をあげるために取り組むこと」を 1 つ決定する　　⑤～⑥終了するまで 15 分
⑦全体に発表する（全校授業協議会）

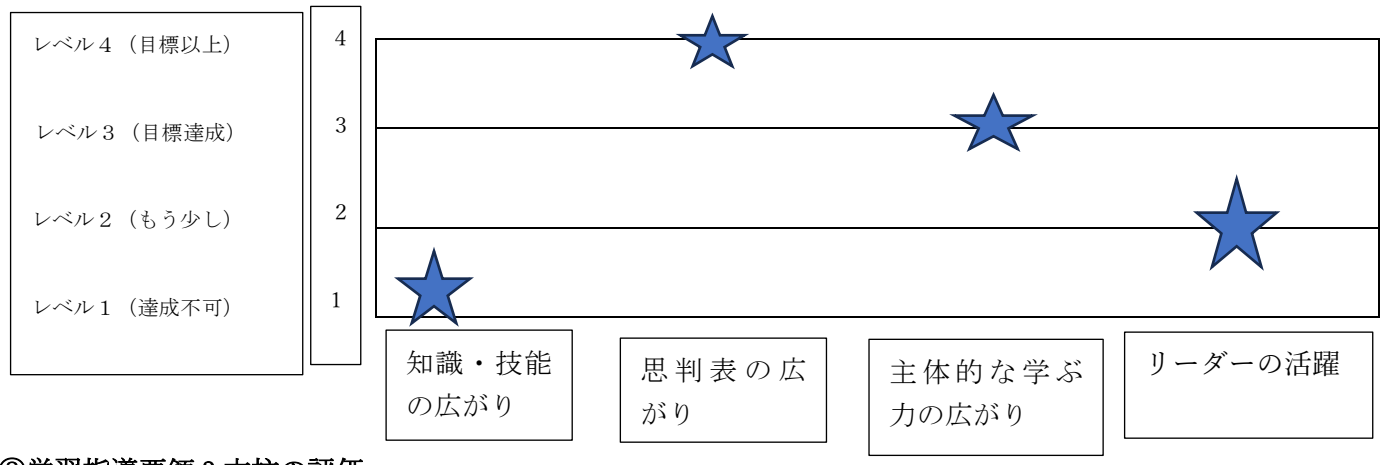
(4)　学習活動評価の可視化

何点かを選び、長期視点で評価方法を選ぶ。

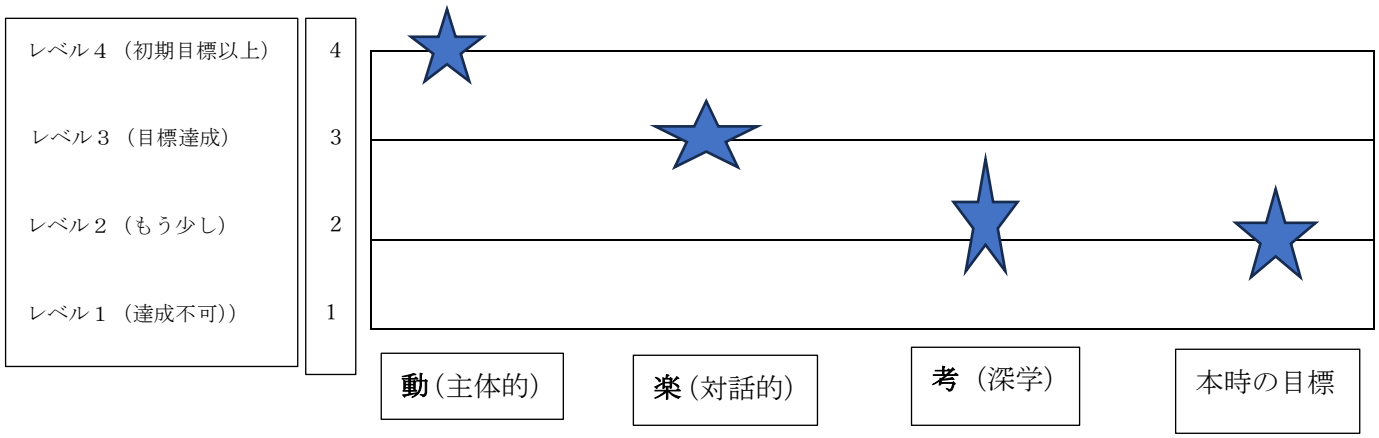
①問題解決学習過程の評価（三原大会で実践）



②資質・能力の３つの柱に対応した学習評価



③学習指導要領 3 本柱の評価



④個別最適・協働的な学びにつなげる授業評価へ

自分で「目標（めあて）を決め、好きな場所で好きな仲間と好きな学習方法」で学ぶことを評価する。

留意点

アまずは、問題解決的な学習過程の評価を行う。（教師主体の授業（一斉授業）を減らす）

イ上記４視点の可視化評価の充実のために項目を混ぜ評価を行う。

ウこの見える評価の前に、個人内評価をする。（授業備品 294 号、みがき度チェック）

エ子どもの声を第一に考え、子どもと教師が一緒になり評価を行う。（教師の評価は止める）

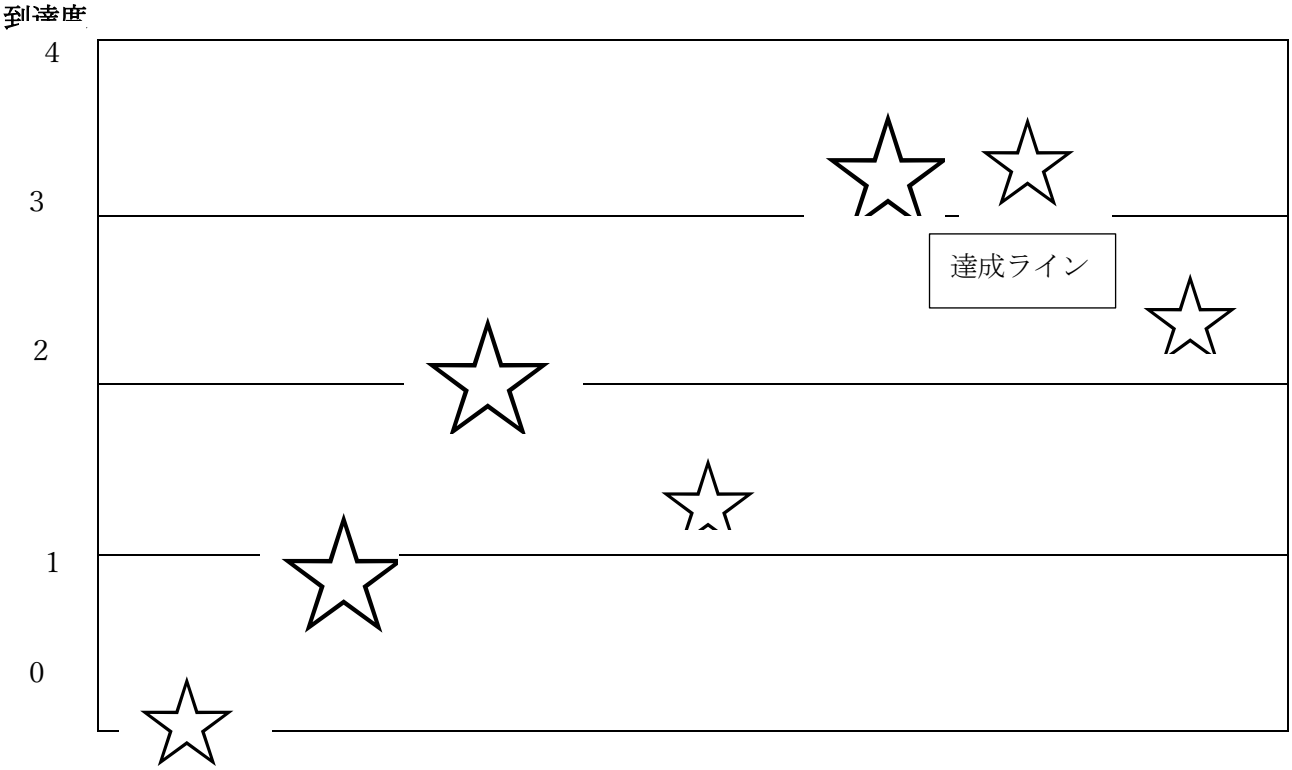
オ教師間の評価は、付箋紙やタブレットを使い短時間で行う。

２　協議会シート（備品 285）

教師主体の授業では、子どもは育たないことに気が付いただろうか。教師だけの授業評価も、次の授業にはつながらない。子どもの参加が重要である。そこで、子どもと教師の協働の学習活動評価を複数回行うとよい。これが授業評価（学習活動評価）だ。

教師だけの授業評価も、次の授業にはつながらない。

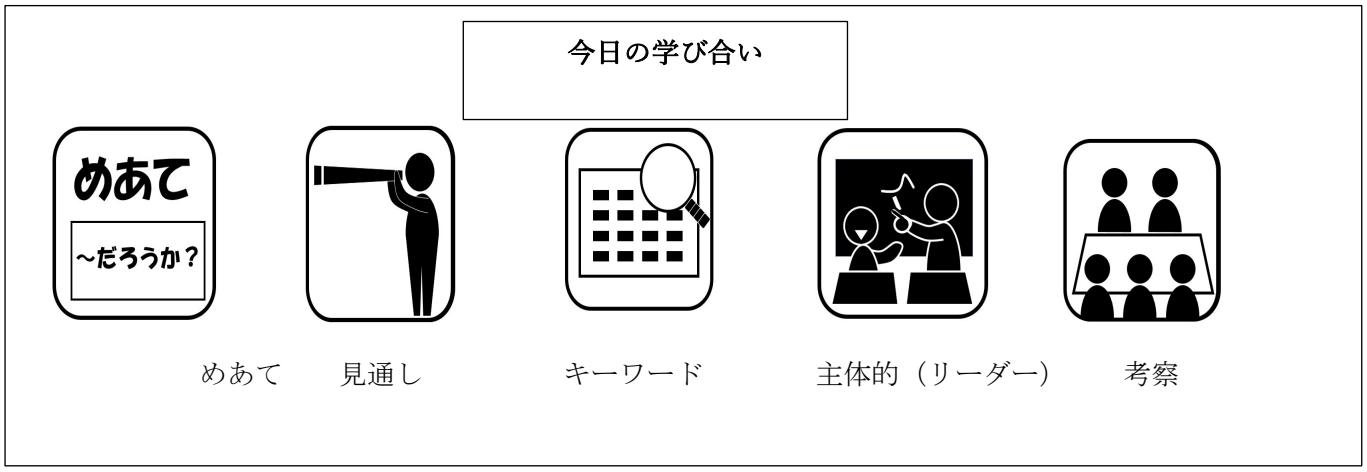
(1)　学び合い評価シート（模造紙半分）



１めあて　２見通し　３キーワード　４グループ組　　５考察　　６リーダー　７子ども主体

（他に、板書、言語活動、指導要領、単元計画、学習指導案、ホワイトボード、ICT 等が予想される。）

(2)　評価項目の別掲（評価シートとあわせて「今日の学び合い」



3　子ども協議会 A(御津中)

（学級で行ってくる内容）

(1)　学び合い評価シート（模造紙半分）(2)　みがき度を学級全体で相談し、全校で評価・情報交換へ向かう。

（学校全体協議会）

(2)　全員が、付箋紙に自分の評価数値と考えを記入する（学びの班で評価項目を分担する方法もある。）

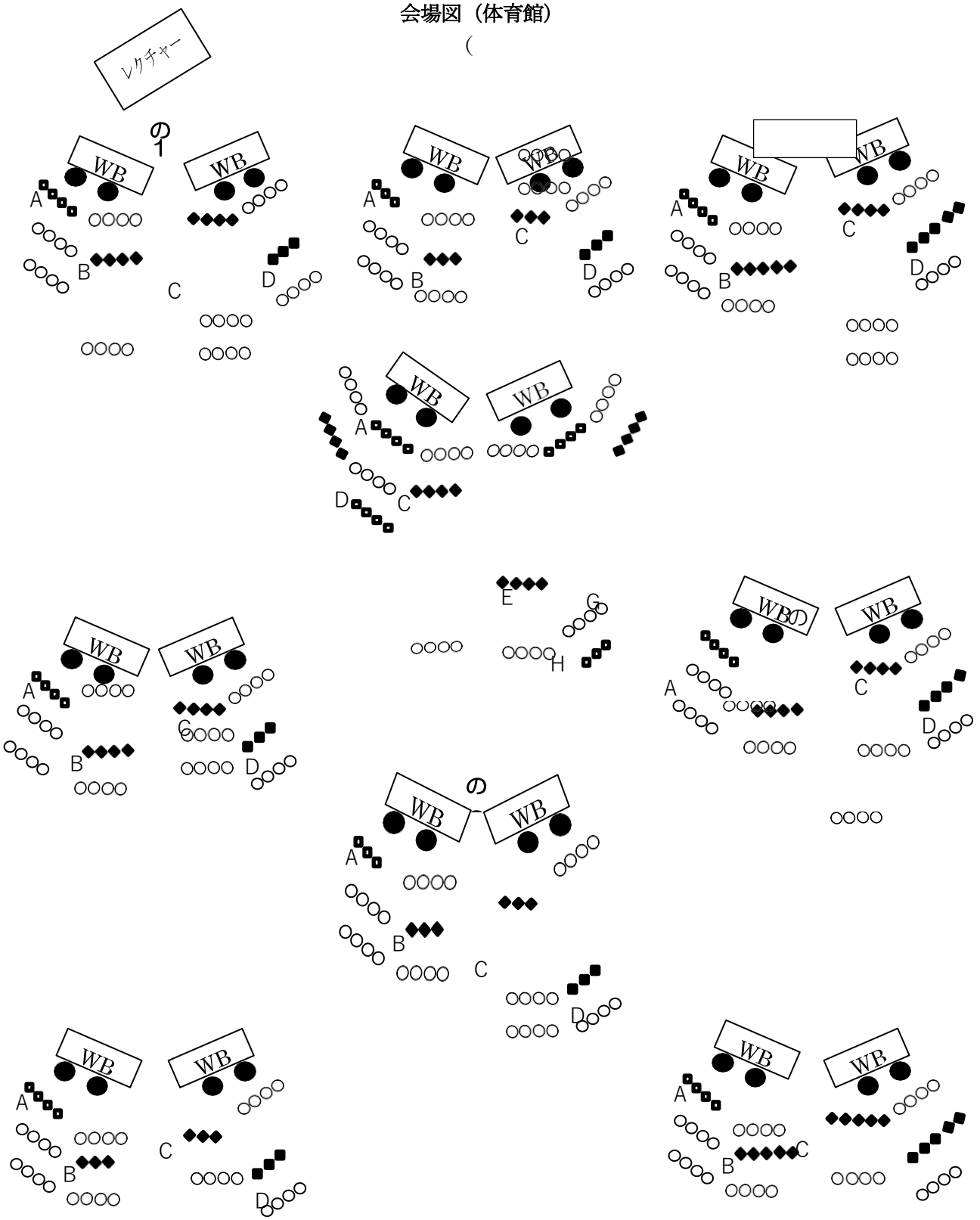
(3)　授業評価シートに付箋紙を貼り、出し合い、数値化を図る。

(4)　学級全体で、授業評価シートに②の意見を数値中心に集約する。

(5)　次の授業に努力することを、リーダーが発表する。

＊教師だけの評価は、別な日にワークショップで行う。（行わないこともある。）

会場図（体育館）

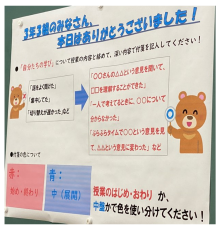


4　子ども協議会Ｂ

学級内の評価にとどめる。特徴は、参観した子どもが授業中に評価をして次回の授業に活かすことを伝える。

当該学級の子どもの授業評価

授業参観教科リーダーの振り返り



参観者の子どもの授業評価

5　教師間の授業評価

教師だけの授業評価は、「やっている感」だけであったと思う。授業者は賞賛され、参加者は当たり障りのない意見を言う。これで授業が変わっただろうか。特に、教科教育に精通した教師が授業を行うと、周りは何も言えない。未だに、教科教育が多く、学び方の研究が少ないのもそうしたことからきていると思う。

このことは、組織全体の在り方にも原因していると思える。教師の中には専門教科の意識が強く、他教科の教師が何も言えないような状態もある。管理をすることも難しい。学習指導要領が変わっても、教科の内容を強く主張するため、教科横断的な意識がない。

このことに目をつぶってはならない。教科教育者の前に、これから変わる時代の求める人物像を教科を越えて追い求めなければならない。

2030 に学習指導要領が変わるが、私は、現在の学習指導要領の再徹底だと思う。主体的な学び、個別最適な学び、ICT の活用等だと思う。

それには、教師間の授業評価を変えるところから始めるとよい。

学習指導案や、教科指導についての評価は、思考・判断・表現、知識技能等、学びに向かう力等作成や評価が行われてきた。私たちは、それをワークショップ評価で行ってきた。だが、本当に良い授業には行きつかなかった。その原因は、評価方法にあったと思う。研究会での授業評価は、「次につなぐ」ということが形だけだった。そこで、今後は評価 3 観点項目と平行して、新たな「学び方」の評価方法を取り入れていくとよい。課題が浮き彫りにされるので授業改革は進むだろう。

教師間の授業評価

A テーマ

ア子どもの輝いている姿（青付箋）

イ子ども停滞している姿（赤付箋紙）

B テーマ

子供全員が自分の考えを伝えることが出来ていたか（目指す子供像から）

(1)　子どもの自主評価、相互評価（学習指導要領）を評価の中心にする。

(2)　教師間の評価は、短時間で行う。参加者が付箋紙を渡すぐらいでよい。